

『ダンマパタ』（法句經）の梗概

三 枝 充 惠

第一章 対句 yamaka (1~20)

第5・第6を除き、二偈ずつ、それぞれ否定と肯定とを内容とする偈が対をなしている。

ペーリ文『ダンマパダ』(Dhammapada法句經)について
は、いまさら解説を必要としない。その内容も、二十六章
四百一十三偈の説くところは、平易であって、そのまま味
読するのがふさわしい。日本語訳も十種に余り、解説・講
話の類もまた十種近くに及ぶ。ここにその梗概を発表する
のは、筆者のはじめ数年来の「原始仏教思想の研究」の一端
を占める未定稿であり、編集委員の依頼によるものとはい
え、紙面を汚すことに忸怩たるものがある。

ひとこと付言すれば、筆者が「思想の研究」をめざして

いるところから、含蓄の深い比喩は、文学的のゆえに、割
愛している。各章のはじめにほんの一行ずつその章を解説し
て、直ちに本文に入る。なお重要な語句にはペーリ語を付
した。洋数字は（ ）のなかのものも含めて、すべて偈
の番号である。

7・8—〔不淨を〕清浄(不淨)と見、感官 *indriya* を抑制せず(抑制し)、飲食に節度なく(あり)、怠惰で(信念あり)、努めはげまない(はげむ)もの、魔王 *Māra* はかれを必ず征服する(征服しえなゝ)。

9・10—汚れを除かず(除く)、節制と眞実とがない(ある)ならば、袈裟をつける資格がない(ある)。

11・12一本質でないもの(本質)を本質 *sāra* であると思ひ本質を本質でない(ある)と見る人は、本質に到達しない(到達する)。

13・14—修養のない(ある)心には、貪欲 *rāga* が侵入する(しない)。

15・16—悪い(善く)いふをすれば、いの世と死後とに悲しむ(喜ぶ)。自己の行為 *kamma* の汚れ(清浄)を見て、その人は悲しみ悩む(喜び楽しう)。

17・18—悪い(善く)いふをすれば、いの世と死後とに苦しむ(喜ぶ)。「私は悪い(善く)いふをした」といって苦しみ(喜び)、地獄 *duggati*(天界 *suggati*)においてやむに苦しむ(喜ぶ)。

19・20—たとえ聖典を読誦する」とが多く(少なく)ても、放逸でこれを実行しない人(法にしたがつてゐるまゝ)、貪欲と瞋りと迷いを捨て、正しい知識があり、心が解脱し、執着

のない人)は、道の人(沙門)の列 *bhāgavā sāmaññassa*に入らない(入ぬ)。

第二章 不放逸 appamāda (21~32)

放逸 *pamāda* をこよしめ、不放逸を教える。

不放逸は不死の道 *amatapada*、放逸は死の道(21)。不放逸に通達した人は賢人 *ariya* の境地を楽しむ(22)。賢者たち *dhīrā* はつねに奮励し、無上の安らぎのネハニバナ *nibbāna* *yogakkhema anuttara* を獲得する(23)。勉励し、法にしたがつて生きる *dhammajivina*、不放逸な人の名声は増大する(24)。勉励・不放逸・自制によつて、智者 *medhavin* は、煩惱の侵すことのない灑(dipa ょうじゅう)をつくる(25)。愚かもの *bala* は放逸にふたり、智者は不放逸を守る(26)。放逸にふけるな(27)。賢者 *pandita* は不放逸によつて放逸をしりぞけ、憂ソカ *soka* を去る(28)。不放逸でよくめぐめた賢者は、駿馬のように進む(29)。不放逸は賞讃され、放逸は非難される(30)。不放逸を楽しみ、放逸をおそれる修行者 *bhikkhu* は、束縛を焼きつつ進む(31)。その修行者はすでにネハニバナに近づいた、退転しない(32)。

第三章 心 citta (33～43)

心は動きやすく、落ちつかない。心の心を正しく制御すべき」と教える。

心は動搖し、守りがたく、抑えがたい。智者 medhāvin はこれを直ぐする (33)。心は魔王の世界から逃れようとする (34)。心えがたく、欲情 kāma のままに動く心を制御する心は喜ばしい。制御された心は安樂 sukha をもたらす (35)。甚だ微妙で欲情のままに動く心を、智者は守らなければならぬ。守られた心は安樂をもたらす (36)。遠くをすらい、形なく、胸にかくれた心を制御する人は、魔王の束縛から脱する (37)。心が落ちつかず、正しき法 saddhamma を知らず、信 pasāda の動搖する人の智慧 paññā は完成しない (38)。心に煩惱なく、思慮に迷ひなく、善悪を超越し pahina、めざめている人 jāgaratā には恥れがない (39)。心を固め、智慧を武器として、魔王と戦え (40)。身体はやがて地上に横たわる (41)。邪惡に向いた心は、大きな惡をなす (42)。正道 sammā に向いた心は、大きな善をなす (43)。

第四章 花 puppha (44～59)

花にまつわるめざめの教えを集める。

誰のが地上界・ヤマ界(地獄界)・天上界を征服し、真理

の心 dhammapada を集めるか。熟練者が花を集めらるべき。修道者 sekha がそれを果たす (44・45)。身体は水泡・蜃氣楼の心とくじあるとかどる人は、魔王の花の矢(誘惑)を断ち切る (46)。花(快樂)のみを摘んで、心に執着のある人を、死はとらえ去る (47)。花のみを摘んで、心に執着があり、愛欲にあくことのない人を、惡魔 antaka は征服する (48)。蜜蜂が花をそなわす蜜をとり去る (49)。聖者 muni は村を托鉢すべし (49)。

他人の過失・他人のした心・しない心を見ると、自分のしたこと・しないことだけを見よ (50)。愛らしく色うるわしく、香りのない(ある)花のように、実行のとみなわない(ともなつた)人の心 vacā は効果 phala はない(ある) (51・52)。花から花輪をつくるように、多くの善事 kusala をなすべし (53)。花の香は風にせからい、正しい人 sappurisa は一切の方向にかかる (54)。種々の香のうち、戒 sila の香は最上で、神々のなかまでかかる (55・56)。戒を完成し、不放逸に生活し、正しくからめて解脱した人 sammadāñna-vimuttā には、魔王も近づくことはできない (57)。塵の山のなかに蓮華が生ずるがゆゑ、凡夫 puthujana のなかに正しくめざめた人 Sammāsambuddha の弟子 sāvaka は、智慧

によって輝く (58・59)°。

第五章 愚かもの blāa (56~75)

愚かものについて。

眠れない人には夜は長く、疲れた人には道が長く、正しい真理 saddhamma を知らない愚かものには輪廻 samsara が長い (60)。道を行くのに、自分よりすぐれた人が同等の人に出あわなければ、ひとりで行くべし。愚かものを連れにすぐのではない (61)。愚かものは子や財産について悩む。自分がすでに自己のものではない attā hi attano natthi° どうして子・財産に及ぶのか (62)。愚かものがその愚かれを知れば、それだけその人は賢者 pāṇḍita である。愚かものが賢いと思うならば、その人はおもしく愚かものである (63)°。

愚かものは一生賢者に仕えても、真理 dhamma を知らない。匙の汁に対するがいとくやある (64)。智者 viññū は瞬時でも賢者に仕えれば、直ちに真理をえる。舌が汁に対するがいとくである (65)。愚かものは自己に対して敵のいとくあるがい (66)。おひない、のちそれを後悔し（後悔せず）、泣かながら（轟んぐ）その果報を受ける。このようなおひないはよくなされたものではない（である） (67・68)°。悪いことか、果報の生じない間は、愚かものはそれを蜜のい (69)°。賢者は自己 attan を制御する (80)。賢者はそしられ

とも思つてゐる。果報が生ずると、苦 dukha を受ける (69)。愚かものは苦行をしても、真理を疊量している人 saṅkhatadhamma の十六分の一にめ値しない (70)。悪い行為をしても、灰におおわれた火のようだ、くやびりながら愚かものにしたがう (71)。愚かものは智 nātta が生じても、ためにならず、その幸運をせらう (72)。虚しい名声を望む人（愚かもの）がいる (73)。愚かものには、「自分だけによつてなされる」「自分の思ふのままである」と欲望 icchā と慢心 māna が増大する (74)。利得に導く道とネハニ nibbāna どしたる道とがある。ブッダの弟子の修行者bhikku Buddha sāvaka は、それをぞり、尊敬をよぶゝにせず、孤独の道に専心やぐし (75)°。

第六章 賢者 paitṛ̥da (76~89)

賢者と交わぬく めるゝ、賢者のありかたを説く。

罪過を指摘し叱責する智者 medhāvin・賢者と交われば、善があつて、惡はない (76)。戒めよ、教えよ、不当なことを遠ざけよ (77)。悪友・卑しい人と交わるな。善友・最上の人と交われ (78)、真理 dhamma を飲むものは安樂に眠る。賢者はつねに賢人 ariya によつて説かれた真理を楽しむ。賢者は自己 attan を制御する (80)。賢者はそしられ

ても、ほめられても、動じない（81）。賢者は真理を聞いて心淨らかである（82）。樂にも苦にも賢者は動じない（83）。

子孫・財産・土地を望むながれ。戒あり、智慧あり、正しい人となれ（84）。彼岸に達する人 pāragāmin は少ない（85）。真理が正しく説かれたとき、その真理にしたがう人は、彼岸にいたるであろう（86）。賢者は惡を捨てて、善をおこなえ（87）。

賢者は欲望を捨て、無一物 akiñcana となり、心の汚れ cittaklesa を除いて、自口を淨めよ（88）。やとりを得る方法 sambodhiyanga によって、心を出しつつ修行し、煩惱を滅ぼして輝く人は、この世におこつて安ひきに帰した parinibuta（89）。

第七章 尊敬されるぐれん人 arahant（89～99）

一切を捨てた人をほめたたえる。

憂いを離れ、解脱 vippamutta。一切の束縛を断つた人には、苦惱 parilāha がない（90）。正しく思ふのある人は出家する（91）。如 sunñata と無相 animitta と解脱 vimokha の境地にある人の道は、追隨しがたい（92・93）。感官 indriya が静まり、慢心を捨て、煩惱を滅ぼした人を、神々が褒め羨やむ（94）。敬虔な人はよく耐える。かれはもはや輪廻しない（95）。正しくわかつて、解脱 vimutta、静けりやをきても、戒（智慧）を破り、心がしゃまぬない asamāhita な

得た upasanta 人は、心ゆりとせぬおいたいも寂靜 santa である（96）。妄信なく assaddhā、無為（絶対）をぞひの akataññū 欲望を捨てた人こそ、最上の人である（97）。尊敬されるぐれき人（アラカン）の住する場所は、どんな土地も、その地は楽しい（98）。森林 arañña は樂しい。それでは欲望は求めない（99）。

第八章 千 sahassa（100～115）

千、百など、数に關連ある文を集める。

無益な語（句）を集めて、千のことば（千の詩、百の詩）として、有益な一つのことば（詩）の方がすぐれていね（100～102）。戦場で百万人に打ち勝つものより、己れひとりに打つ勝つものこそ、最上の戦勝者である（103）。克服された自口 attan は、他の人々の勝利よりもすぐれてくる。自己を抑制しておこなう人の勝利を、神も鬼神も魔王も梵天も破ることとはできない（104・105）。ひとりのよく修養した人の供養は、百年の祭祀よりもすぐれている（106・107）。一年間の供養・祭祀も、おこなうの正しい人々の尊敬の四分の一にも値しない（108）。つねに長上を尊ぶ人には、四つの法が増大する。寿命・美しさ・安樂・力である（109）。百年生

らば、戒(智慧)をそなえ、心を収めた人 *jhāyina* が一日生きた方がすぐれている^(110・111)。百年生きても、怠惰であり、精進しないならば、熱心に努力する人が、一日生きた方がすぐれている⁽¹¹²⁾。百年生きても、生滅の理 *udayavavyaya* (不死の道 *amata pada*) (最高の法 *dhamma uttama*) を見ないならば、それを見る人が一日生きた方がすぐれている^{(113)～(115)}。

第九章 惡 *pāpa* (116～128)

善 *kalyāna* と惡、その果報、惡を避けるべきことを教える。

善にいそげ。心を惡より遠ざけよ。善を怠れば、意は惡を喜ぶ⁽¹¹⁶⁾。惡をしても、くりかえしてはならぬ。惡を積むことは苦である⁽¹¹⁷⁾。善をしたならば、くりかえしてせよ。善を積むことは樂である⁽¹¹⁸⁾。惡人もその惡の果報が生じない間は幸いを見る。しかし惡の果報が生じると、禍いを見る⁽¹¹⁹⁾。善人もその善の果報が生じない間は禍いを見る。しかし善の果報が生じると、幸いを見る⁽¹²⁰⁾。水滴のごとく、愚かもの(賢者)は少しずつ積んで惡(善)に満たされる^{(121)～(122)}。惡を避けよ⁽¹²³⁾。惡をなさない人に悪いはない⁽¹²⁴⁾。正しい人・汚れのない人を害すれば、惡はかえ

つてその愚かものにありかかる⁽¹²⁵⁾。惡をなした人は地獄 *niraya* に、正しい人 *sugatin* は天界 *sagga* に、煩惱のない人 *anāsava* はネハンに入る *parinibbanti*⁽¹²⁶⁾。空中・海中・山の洞窟に入つても、惡業 *pāpakamma*・死の力から免れ得るふりはない^{(127)～(128)}。

第10章 鞭 *dñḍda* (129～141)

鞭をもつて人を害するながれの教えを説く。

すべてのものは鞭におびえ、死を怖れる(生を愛する)。(他を)殺すな、殺させるな^{(129)～(130)}。鞭をもつて生あるものを害する(害しない)人は、自己の安樂を求めて、死後安樂が得られない(得られる)^{(131)～(132)}。粗暴なことばや怒りのことばは、かえつて自己に鞭を加える⁽¹³³⁾。沈黙して語らなければ、すでにネハン *nibbāna* を得ている。怒りのことばは存在しない⁽¹³⁴⁾。鞭で牛を驅り立てるように、老と死とは生けるものの寿命を駆り立てる⁽¹³⁵⁾。愚かものは悪い行為をしてもさとらず、自己の行為によつて苦しむ⁽¹³⁶⁾。罪・邪念のない人に鞭を加える人は、次の十事のいづれかに遭う⁽¹³⁷⁾。苦痛・老衰・傷害・病氣・心の狂乱・国王よりの災禍・讒訴・親族の滅亡・破産・火災。この智慧のないものは、死後地獄におちる^{(138)～(140)}。種々の苦行も、

疑惑をのこす人を淨める」とはない⁽¹⁴¹⁾。心しづまり、自制し、おこないが淨らか brahmacārin や、あくびの生あるむのに鞭を加えぬとのない人は、バラモン brahmaṇa' 道の人 samāṇa、修行者 bhikkhu である⁽¹⁴²⁾。みずから恥じ、よく制御する人は、他からの非難を受けない⁽¹⁴³⁾。修行にはさぬ。信 saddhā・戒 sila・精進 viriya・精神統 samādhi と真理の識別 dhammavinicchaya などより、知と行とをそなえ、苦を滅ぼせ⁽¹⁴⁴⁾。有徳者 subbatā は自己 attan を制御する⁽¹⁴⁵⁾。

第一一章 老 jarā (146~156)

肉体は常住ではなく、生あるものは必ず老と死とがともなう。

何を喜んでいるのが、「ハの生せ」燃えつゝあるのに。暗黒におおわれているのに、なやめ灯明を求めないのか⁽¹⁴⁶⁾。身体は病氣が絶えず、欲が多く、堅固 dhuva・常住 thiti ではない⁽¹⁴⁷⁾。肉体 rūpa は衰え、病み、こわれやすい。生あるもの jīvita は必ず死ぬ⁽¹⁴⁸⁾。白骨となつてから、何の喜びがあるうか⁽¹⁴⁹⁾。城 (nagara 身体) は、骨と肉と血でつぶらね、そのなかには、老と死と慢心と偽りなどがしまわれてゐる⁽¹⁵⁰⁾。身体 sarīra は老くるが、善人の法 satañca

dhamma は老くることがない⁽¹⁵¹⁾。愚かものは老い、肉は牡牛のように増すが、智慧 paññā はやえない⁽¹⁵²⁾。輪廻 samsāra を経て、生存 jāti はすぐて苦であった⁽¹⁵³⁾。心は万物から離れ、愛欲 taṇhā を滅ぼした⁽¹⁵⁴⁾。青年時代に淨らかなおこない brahmocariya をおこなわなければ、やがて衰え、死滅する^{(155)・(156)}。

第一二章 血己 atta(n) (157~166)

自己を守り、自己を調え、制御し、自己の主であると知り、他人にはたのきかける前に、まず自己の義務を尽くすべしとを教える。

自己をよく守るべし⁽¹⁵⁷⁾。まず自己を正しく調べ、そのち他を教えるべし⁽¹⁵⁸⁾。他人に教えるべし、みやからおこなうべし。自己は実に制御しがたい⁽¹⁵⁹⁾。自己こそ自己の主である attā hi attano nātho。自己がよく制御されたふれ、人は得がたい主を得た⁽¹⁶⁰⁾。自己のなした惡は自己から生じたものであり、愚か者の dummedha を打ち碎く⁽¹⁶¹⁾。破戒の甚しい人は、みずから破滅する⁽¹⁶²⁾。不善・自己に害あるいふせおこないやすべし、利益あり善いことはおこないがたし⁽¹⁶³⁾。尊敬されるべき人 arahant の教えを非難する愚かものは、みずから破滅する⁽¹⁶⁴⁾。みずから惡

をなせば、みずから汚し、みずから悪をなさなければ、みずから淨める。みずから淨・不淨となる。人は他人を淨めるこひはできない（¹⁶⁵）。のために尽くして、自己の義務 attadattha をおろそかにしてはならない。自己の義務を知つて、専念すべし（¹⁶⁶）。

第一三章 世間 loka（¹⁶⁷～¹⁷⁸）

世、世間の語のある教えを集め。

下劣な法 hīna dhamma をおいだらう。放逸に生活するな。邪見に従うな。世俗の徒 lokavaddhana となるな（¹⁶⁷）。奮起せよ。法に従つておいだらう人 dhammacārin は、この世・あの世において安樂に住する（¹⁶⁸・¹⁶⁹）。水泡・蜃氣樓のいとく世間を觀ずる人を、死王は見る」とがな（¹⁷⁰）。飾り立てられたこの世間に、愚かものは耽溺し、智者は執着しない（¹⁷¹）。前には放逸であつても、後に放逸でなくなれば、雲間を出た月のようだ、その人はこの世を照らす（¹⁷²）。悪じおこないをして、善をもつておおえは、雲間を出た月のようだ、その人はこの世を照らす（¹⁷³）。この世は暗黒である。このなかで洞察する vipassati 人は少なし（¹⁷⁴）。賢者 dhīra は魔王との軍勢を打ち破つて、この世から離脱する（¹⁷⁵）。唯一の法 eka dhamma を犯し、妄語を語り、来世

をあわせる人は、どんな悪でもおいだら（¹⁷⁶）。賢者は施しを喜び、あの世で安樂になる（¹⁷⁷）。地上の王、天界に赴く、全宇宙を統治する、それよりも、ネハンぐの第一歩（預流果 sotāpattiphalā）はすぐれでごる（¹⁷⁸）。

第一四章 ブッダ Buddha（¹⁷⁹～¹⁹⁶）

ブッダ、やむつた人（覓者）に関連する文を集め。

その勝利にはこの世のなんびとも及ぶ」とのである。（まといつく欲望も誘う」とのでもない）無限なるブッダを、どの道 pada で誘ふ」とがであります（¹⁷⁹・¹⁸⁰）。禪定jhāna に専念し、賢明であり、出家生活 nekkhamma の静かれを喜び、やむつ sambuddha を得て、思慮深く人 satimata は、神々れんめ羨めむ（¹⁸¹）。人 manussa として生まれるゝは難く、人間の生存 maccāna jīvita は難い。正法 sad-dhamma を聞く」とは難く、諸ブッダの出現は難い（¹⁸²）。一切の悪をなさず、善をもつたる、自己の心を淨める、これが諸ブッダの教えである Sabbapāpāpassa akaraṇam, kusalassa upasampadā, sacittapariyodapanam, etam Buddhāna sāsanam（¹⁸³）。忍苦 khanti は最上の苦行、べく nibbāna は最上であるが、諸ブッダは説く。他人を害する出家者 pabbajita なく、他人を恼ます道の人 samaja など（¹⁸⁴）。熙口を

わざ、そりなわざ、戒 pātimokkha を守り、食事の節度を知

きない (195・196)。

り、独り坐臥し、思索に専念する、これが諸ブッダの教えである (185)。欲望 kāma は満足を知らず、かえって苦痛である。正しく教へた人の弟子 sammāsambuddhasāvaka は欲望の滅尽 tapahakkhaya を喜ぶ (186・187)。恐怖にかられて、山や森や園や樹や靈廟に帰依所 saraṇa を求める (188)。しかしそれは安全ではなく、苦より脱する人がでれない (189)。ブッダと法 Dhamma と教団 Saṅgha に帰依する人は、正しい智慧 sammapañña が、四聖諦 cattāri ariyasaccāni を見る (190)。

如く如の起因としての滅尽は八聖道 Dukkhān, dukkhasamuppādān, dukkhassā ca atikkamān, ariyañ c' atthāngikāñ maggān, dukkhūpasamagāminān (191)。それが安全・最上の帰依所であつ、いじめやぐれの苦より脱する (192)。尊い人は得がたし。その賢者 dhīra が生まれる、その民族は安樂で、繁榮する (193)。諸ブッダの出現は樂しく、正法を説く saddhammadesanā は樂しく、教団の和合 saṅghassa sāmaṇgī は樂しく、和合した人々の修行 tapo は樂しく (194)。虚妄 papañca を脱し、憂惱 tīṇasoka を超えた諸ブッダ・弟子たが、心身や心身 nibbuta 恐怖のない人、そうした人々を供養するの功徳 puñña は、なんびくもせかぬことがで

第15章 安樂 sukha (197~208)

怨みなく、恼みなく、貪りなく、安樂に生活しよう、ネハンは最上の安樂である、惡・苦を離れる、などの教え。

怨み（恼み・貪り）をもつ人々のなかで、怨み（恼み・貪り）なく楽しく生きよう (197・198・199)。何も所有せず、楽しく生きよう、喜びを食物としよう (200)。勝利は怨みを生じ、敗者は苦しき。心のしゃまつた人 upasanto は、勝敗を捨てて、安樂に生まる (201)。貪欲は火、瞋りは罪、五体 khandha は苦、心の寂靜 santi は最上の安樂である (202)。飢えは最大の病氣、万物 saṅkhārā は最大の苦。これを如実に yathābhūta 知れば、最上安樂のネハン nibbāna がある (203)。健康は最上の利益。満足は最上の財産。信頼 visāssa は最上の親屬。ネハンは最上の安樂 (204)。孤独と寂靜 upasama との味を飲んだ人は、法悦 dhammapīti を味わい、悪を離れる (205)。聖人 ariya に会うのは善く、ともに生活すれば、つねに樂しい。愚かものに会わなければ、つねに安樂である (206)。愚かものとは、憂い・苦がある。賢者は樂しい (207)。賢者 dhīra、智者 pañña、博学の人 bahussuta、忍耐強い人 dhorayha、戒ある人 sīla、信ある人 vatavanta、

聖人 ariya にしたがえ (208)。

第一六章 愛 piya (209~220)

愛(好) より憂・怖れが生ずる。愛より離れるべからる
を教える。

愛に執着するものな、専心瞑想する人 yogin を羨やむ
(209)。愛する人と会うな。憎い人とも会うな (210)。愛する
ものをつくるな。愛憎のない人には束縛がない (211)。愛よ
り憂い soka・怖れ bhaya が生ずる。愛を離れた人には憂い
・怖れはない (212)。親愛 pema より……、親愛を…… (213)。
欲楽 rati より……、欲楽を…… (214)。愛欲 kāma より……
愛欲を…… (215)。欲望 tanhā より……、欲望を…… (216)。
戒と識見 dassana とをそなえ、正法に住し dhammattha'
真実 sacca を語り、自己のうとぬ kamma をおこなう人は、
愛される (217)。説明を超えた境地 anakkhāta に達しようと
し、思慮に富み、心が欲に束縛されない人は、「流れをせか
めのばるの」 uddhamśoto といわれる (218)。遠方から帰る
人を喜んで迎えるように、善いことをしたいの世からあの世
へ行く人は、善い果報に迎えられる (219~220)。

第一七章 怒り kodha (221~234)

怒りを去れ、防げ、と教える。

無一物 akincāna の人は若に追われぬといがな (221)。怒
りを制する人を眞の駁者 sārathi と呼ぶ (222)。柔和によつ
て怒りを克服せよ。善によつて不善を、施しによつて吝嗇を
真実 sacca によつて虚言者を克服せよ (223)。眞実を語れ、
怒るな、請われたならば与えよ (224)。殺生せず、つねに身
を制御する聖者 muni は、憂いのない不滅の境地に達する
(225)。つねにめがめて勉学し、ネハム nibbāna に志す人
は、煩惱 āsava が滅する (226)。この世に非難されないもの
はない、昔からそうである (227)。ただ非難されるだけの
人、ただ賞讃されるだけの人は、過去・未来・現在ともない
(228)。おこないに欠点なく、賢明で、智慧と戒とをそなえ
てらるる智者 medhāvin とはめられる人は、神々や梵天もほ
める (229~230)。身体 (ハトバ・意) の怒りを防ぎ、身体
(ハトバ・意) を制御せよ。身体 (ハトバ・意) によつて善
行をおこなえ (231~232)。賢者 dhīra は身体・ハトバ・意
を制御する (234)。

第一八章 汚れ mala (235 ~ 255)

汚れをはらえと教え、また汚れとは何かを説く。

汝はもはや尽きようとしている。汝の行方には何の資糧もない (235・237)。汝みずから自己の漏 (dīpa ようふるい) をつくれ。すみやかに努めよ。賢者pañdita となれ。汚れをはらえ (236・238)。

智者 medhāvin は順次に、徐々に、刹那刹那に、自己の汚れを除け (239)。放縱なものは、自己の行為 sakakamma のために、惡世界 duggati に赴く (240)。經典 manta を読誦せず、怠惰で放逸であるのは、汚れである (241)。不品行・吝嗇・惡徳 pāpaka dhammā は汚れである (242)。無明 avijā は最大の汚れである。修行者よ bhikkhavo。」の汚れを捨てて、汚れのない人になれ (243)。恥を知らず、汚れた人は、生活が安易である (244)。恥を知り、つねに清浄を求め、謙虚で、淨らかな生活をし、識見のある人には、生活が困難である (245)。殺生し、妄語し、与えられないものを取り、他人の妻を犯し、飲酒にあける人は、自己の根を掘る (246・247)。節制のないのは惡徳 pāpadhamma であると知れ。貪りと非法 adhamma によつて、苦を受けるな (248)。人は信するまゝ yathāsaddha' 好きなまゝ yathāpasādana 施す。他人の飲食物に不満を抱く人は、心の安定 samādhi がない。聞くことが少なくとも、身体をもつて法を見、法を

得られない (249)。これを絶てば、心の安定が得られる (250)。貪欲・瞋り・迷い・欲望は危険である (251)。

他人の過失 vajja は見やすく、自己のは見がたい。他人の過失はまき散らすが、自己のは隠す (252)。他人の過失を詮索してつねに不安を抱く人は、いよいよ煩惱 āsava が増す (253)。虚空 ākāsa に道 pada はなく、仏教以外の教え (bāhira 外道) には道の人 samāna はない。大衆は虛妄 papañca を喜び、真理の体現者 (Tathāgata 如來) たちには虚妄はない。万物 saṅkhārā は常住 sassatā でなく、諸ブッダには動搖 injita がない (254・255)。

第一九章 真理 (法) に生きる dhammatṭha (256 ~ 272)

真理 (法) に生きる人、賢者、法を伝える人、長老、立派な人、道の人、修行者、聖者、聖人のそれぞれについて述べる。

性急に処理せず、適と不適とをわざわざ、真理 dhamma と平等 sama によつて他を導き、智者 medhāvin は真理に生きる人と呼ばれる (256・257)。多く語るのが賢者pañdita ではない。安らぎがあり、怨みがなく、怖れのない人が、賢者と呼ばれる (258)。多く語るのが、法を伝える人 dhammadhara ではない。聞くことが少なくとも、身体をもつて法を見、法を

軽んずる」とのない人が、法を伝える人である⁽²⁵⁾。白髪の人が長老 thera なのではない。かれはむなしくぞうだといわれる⁽²⁶⁾。眞実 saccā と真理 dhamma と不殺生 ahimsā と節制 saññama と制御 dama とかかふ、汚れを捨てた賢者 dhīra が、長老と呼ばれる⁽²⁶⁾。

嫉妬・吝嗇・欺瞞を断ち、瞋りがなく、智ある人が、立派な人 sādhurūpa と呼ばれる^{(26)・(26)}。剃髪してても、禁止を破り、妄語・欲望・貪りをもつては、道の人 samanā ではない。大小すべての惡をしずめた人が、道の人と呼ばれる^{(26)・(26)}。

托鉢に行くから、修行者 bhikkhu なのではない。一切法を身につけて、修行者となる。この世において、善も悪も捨て、淨らかなおじなし brahmacariya を修めるものが、修行者と呼ばれる^{(26)・(26)}。沈黙してしても、愚かであれば、聖者 muni ではない。善を取り、悪をしりぞけるものが、聖者である。この世において、善と悪とを知る人が、聖者と呼ばれる^{(26)・(26)}。生あるものを盡しながゆえに、聖人 arīya と呼ばれる⁽²⁷⁾。修行者よ、煩惱を滅ぼれないがぎり、安心するながれ^{(27)・(27)}。

第110章 道 magga (27~28)

道の語をよくわ種々の教えを集め。

みるみるの道のなかでは八支 atthangika、みるみるの真理 saccā のなかでな四端 caturopadā、みるみるの法のなかでな離欲 virāga、みるみるの人のなかでは眼のある人 cakkhumā が最もすぐれている⁽²⁷⁾。だだの道あるのみ。知見 dassana を淨める以外、他の道はない⁽²⁷⁾。この道を行けば、苦をなくすことが出来る。私は苦の矢を抜くことを知つて、道を説いた⁽²⁷⁾。汝のなすぐれりとは、努力である。真理の体現者 Tathāgata は教示者 akkhātar である⁽²⁷⁾。

「万物はすぐれて無常である Sabbe sankhārā anicca (万物はすべて苦である Sabbe sankhārā dukkhā) (一切法は無我である Sabbe dhammā anattā)」と、智慧 paññā によって見るとき、苦を厭う心がおもろ nibbindatī dukkhe。これが清浄にいたる道 maggo visuddhiyā である^{(27)・(27)・(27)}。

怠惰で、意志が弱く、ゆのぐれなものは、智慧によつて道を見つだすことがない⁽²⁸⁾。心・心・身体の三種の実践道 kammapatha を淨めよ。そうすれば、聖仙 isi の説いた道に達し得るであろう⁽²⁸⁾。瞑想 yoga により、智 bhūri が増大するよう、みずから努めよ⁽²⁸⁾。欲望を去り、欲望のない身となれ⁽²⁸⁾。欲念 vanatha が断たれない間は、そ

の人の心は束縛されている⁽²⁸⁴⁾。自己への愛念 sineha を断て。静けさにいたる道 santimagga を求めよ。ネバ・ nibbāna は幸せな人 sugata によって説かれた⁽²⁸⁵⁾。愚かものはやがて死のいたる心をもとらない⁽²⁸⁶⁾。子や家畜のことには執着する人を、死はれつて行く⁽²⁸⁷⁾。死にとらえられたものを救う」とは、子にも父にも近親者にもできない⁽²⁸⁸⁾。この道理を知りて、賢者 pañcita は戒を守り、ネハンにいたる道 nibbāṇagamana magga をすみやかに浄めるべし⁽²⁸⁹⁾。

第111章 雜集 pakiṇṇaka (290~305)

やめやめかな実践を教える。

小さな楽しみを捨てて、広大な楽しみを望め⁽²⁹⁰⁾。他人に苦を与えて自分の樂を望む人は、怨みから逃れることができない⁽²⁹¹⁾。なすぐれいとを怠り、なすべからぬいとをなす傲慢な人には、煩惱 āsava が増大する⁽²⁹²⁾。つねに身を思念し、なすべからぬことをおこなわず、なすぐれいとにはぐむ思慮深い人は、煩惱が滅する⁽²⁹³⁾。母(愛欲)と父(自我)とを殺し、二王(断見と常見)とを殺して、バラモンは進む^(294・295)。ピータマの弟子たる Gotamasāvakā はいによぐれぬれぬ、昼も夜もつねにアッダ Buddha(或 Dhamma) (教団 Saṅgha) (身体 Kāya) を思ひやかる^(296・297・298)

・²⁹⁹)。昼も夜も不殺生 Ahimsā (修行 Bhāvanā) によって心樂しむ^(300・301)。出家生活は楽しみがたく、在家生活も、同輩とともに住むのも、苦であり、「輪廻の」旅人も苦に陥る⁽³⁰²⁾。信 saddhā・戒・名譽・財産のある人は、どくでも尊敬される⁽³⁰³⁾。善人は遠くまで輝く。不善者は近くにあっても見えない⁽³⁰⁴⁾。ひとり坐し臥し歩み自己を制御し、林辺において楽しむべし⁽³⁰⁵⁾。

第1111章 地獄 niraya (306~319)

いかなるものが地獄に落ちるかを教える。

虚偽を語るもの、みずからなして、自分はしないといふのは、地獄に落ちる⁽³⁰⁶⁾。袈裟をまとつていても、おこないの悪い人は、地獄に生まれる⁽³⁰⁷⁾。破戒・無節制者は、施食を受ける資格はない⁽³⁰⁸⁾。放逸で他人の妻を犯すものは、罪業・不安眠・非難・地獄を得る⁽³⁰⁹⁾。他人の妻に近づいてはならない⁽³¹⁰⁾。誤まり行ぜられた道の人 sāmañña は、地獄に赴く⁽³¹¹⁾。怠けた行為、汚れた誓、ためらう修行 brahmačariya せ、大きな果報 mahāpphala はない⁽³¹²⁾。なすぐれいとは斷固なせ。怠る出家者 paribbāja せ、かえつて汚塵 raja をおれ散らす⁽³¹³⁾。悪事はしないにしたことはない。してからあと、後悔する。善事はするにしたこ

とはない。してからあと、後悔する」とがない⁽³¹⁴⁾。自己を守れ *gopetha attānañ*^o。一瞬ものがしてはならぬ。時機のがすものは、地獄に陥つて歎く⁽³¹⁵⁾。恥ずぐれでないことを恥じ、恥ずぐれないと恥じない。黙もつた見解 *micchā-ditthi* を有する人々は、悪処 *duggati* におかる⁽³¹⁷⁾。罪がない（ある）のを罪があると思い（知り）、罪がある（ない）のを罪がないと見る、誤まつた（正し）見解を有する人は、悪処（善処）に行く^{(318)・(319)}。

第一二三章 象 *nāga* (320)～(333)

象の比喩の教えを集め。

象が矢をこらえるように、私は非難に耐えよう。多くの人々は破戒者であるから⁽³²⁰⁾。訓練して非難に耐える人々は、最もすぐれている⁽³²¹⁾。馬もよい、象もよい、自己を制御した人 *attadanta* はわいによい⁽³²²⁾。これらの獸によつては未到の地 *agata* にいたる⁽³²³⁾とはない。訓練した人は、よく制御された自己によつていたる⁽³²⁴⁾。ダナ・パーラカ *Dhanapālaka* と母ふ象は御しがたい。林の象のことを考えている⁽³²⁴⁾。

なまけて、大食で、ねいろふ愚かものは、輪廻をくりかえす⁽³²⁵⁾。己の心 *citta* は前には放浪したが、いまや完全に

抑制しよう⁽³²⁶⁾。不放逸を喜ぐ。自分の心を守れ。自己を救い出せ⁽³²⁷⁾。賢明な同行者 *sahāya*を得たならば、危難に打ち勝つて、かれとともにに行け⁽³²⁸⁾。賢明な同行者が得られないならば、ひとりで行くがよい。林中の象のように⁽³²⁹⁾。ひとり行くひとりそすぐれている。愚かものを友とするな⁽³³⁰⁾。なにかおこったとき、同行者があるのは楽しい。命終わぬとき、善業 *pūñña* のあるのは楽しい⁽³³¹⁾。父母を敬う」と、道の人であるこゝ *sāmaññata*、バラモンであるこゝ *brahmaññata* は樂しい⁽³³²⁾。老年まで戒を保つこと、信仰 *saddhā* の確立していること、智慧 *paññā* を得ること、惡事をしないことは樂しい⁽³³³⁾。

第一四章 欲望 *tanhā* (334)～(359)

欲望はいよいよ増大し、欲望に満たされた人は苦を受けれる。欲望・貪欲を離れ、滅ぼすべきことを教える。

放逸に行動する人の欲望は増大し、生存から生存へとがまよう⁽³³⁴⁾。この世において強い欲望に征服された人には、憂いが増大する⁽³³⁵⁾。己の世において卑しい欲望を征服する人からは、憂いが脱落する⁽³³⁶⁾。欲望の根を掘れ⁽³³⁷⁾。

欲望の潜在力 *tañhānusaya* を断たなければ、苦は再びあらわれる⁽³³⁸⁾。快樂に向かつて流れる欲望をもつた人は、奔流

に流れれる⁽³³⁹⁾。欲望の流れはいたるといふに流れ、蔓が茂る。智慧 pañña によつて、いの根を断て⁽³⁴⁰⁾。喜びは過ぎやく、執着が強い。快樂を求める人は、生と死とを受けける⁽³⁴¹⁾。欲望に満たされた人は、馳け廻り、束縛と執着とにといえられて、くりかえし苦を受ける⁽³⁴²⁾。欲望に満たされた人は、駆け廻る。修行者 bhikkhu は欲望を除け⁽³⁴³⁾。欲林を出て欲林に心を傾けるゆのは、束縛より脱してまた束縛へ走る⁽³⁴⁴⁾。賢者 dhīra は、鉄や木や草の繩を堅牢とはいひない、宝石や装身具や子や妻への恋著こそ熱烈であり、これを堅牢とする。これを持ち切つて恋著のない人は、愛欲の快樂を捨て、遍歴修行する^{(345)・(346)}。貪欲 rāga にといわれたものは、その流れにしたがつて行く。賢者はこれを断ち切り、恋著なく、一切の苦を捨てる⁽³⁴⁷⁾。前(過去)と後(未来)と中(現在)とを離れれば、生存の彼岸に達する bhavassa pāragū。心が一切から解放された vimutta-mānas なれば、再び生と死とを受けない⁽³⁴⁸⁾。疑惑・貪欲ある人の欲望は、めらに増大する。その束縛を固くする⁽³⁴⁹⁾。疑惑の消失を喜び、つねに思念をいひゆ人は、束縛を断ち切る⁽³⁵⁰⁾。完成に達し nitthaingata、怖れなく、欲望を離れ、汚れなく、生存 bhava の矢を断ち切つた。これが最後の身体である(再び輪廻するとはなし)⁽³⁵¹⁾。欲望

・執着がなく、聖典 nirutti の語義に通達し、文字の結合と順序とを知る人は、最後の身体をもつ人であり、大智者 mahāpañña、大成者 mahāpurisa と呼ばれる⁽³⁵²⁾。

私はすぐてに打ち勝つたゆの sabbābhībhū、すべてを知るゆの sabbavidi であり、すべての物事に汚されていないと sabbesu dhammesu anūpalitto。すべてを捨て sabbāñjaho、欲望を滅ぼす tāphakkhaya、解脱してくる vimutto。みずかぬれゆの sayam abhiññāya、誰れを「歸ゆ」呼ばうか⁽³⁵³⁾。法の施し dhammādana はすぐての施しにぬれぬ。法の妙味 dhammarasa はすぐての味にぬれぬ。法の毒 dhammarati はすぐての毒だと思ふ。欲望の滅尽 tāphakkhaya はすぐての苦にぬれぬ⁽³⁵⁴⁾。財産は愚かものを滅ぼすが、彼岸を求める人 pāragavesina を滅ぼすいじはない。愚かものは財産により、他人も自分も滅ぼす⁽³⁵⁵⁾。田畠は雑草によつてそんなわれ、いの世の人は貪欲 rāga (曇り dosa、迷う moha、欲 icchā) じみつてそんなわれ。ゆえに、貪欲(曇り・迷い・欲)を離れた人の施しは、大きな果報がある^{(356)・(357)}。

第二十五章 修行者 bhikkhu^{(360)・(382)}

修行者のありかた、修行者への教えなどを集める。

い。すべてを制御した修行者は、一切の苦より解脱する（360・³⁶¹）。

手・足・口とばを制御し、内心に喜び、心が安定し、ひとりでいて満足する人を、修行者と称する（362）。口を制御し高ぶらず、人生の目的 attha と法 dhamma とを明らかにする修行者のことばは快よい（363）。法を楽しみ、法を喜び、法にしたがつて考え、法を思い続ける修行者は、正しい法から堕落することがない（364）。

自分の得たところを軽んずるな。他人を羨やむな。他人を羨やむ修行者は、心の安定が得られない（365）。たとえ得るところが少なくても、修行者が自分の得たみいぬを軽んじなければ、神々もかれを賞讃する（366）。名 nāma と物 rūpa とにおひて、わがもの mama といふ思いがなく、またそれがないからといって憂えることのない人、これが修行者と呼ばれる（367）。慈しみ mettā のある生活をし、ブッダの教えを信ずる pasanna 修行者は、静かで、流転の静止した安樂境 pada santa sankhārūpasama sukha じつたるであらう（368）。

修行者よ、貪欲と瞋りとを断ち切れば、ネバ・nibbāna じいたるであらう（369）。五つの執着」を断ち切った修行者は激流を渡つた人 oghatinī といわれる（370）。修行者よ、瞑想せよ jhāya。放逸になるな。愛欲の対象 kāmaguṇa に迷う

な（371）。

智慧 pañña のないものじな瞑想 jhāna がなく、瞑想のないものには智慧がない。智慧と瞑想のある人は、ネバ・nibbāna に近づいている（372）。丘屋で、心静かに、正しく法 dhamma を観想する修行者は、人間界にない楽しみを受ける（373）。五体 khandha の生と滅とを思念すればするほど、不死 amata を知つた人の歎喜を得る（374）。この世で智慧ある修行者の出発点は、感官に注意し、満足し、戒律 patimokkha じたがつて節制し、おひないが淨く、善友と交われ（375）。親切であり、善いおこないをせよ。そうすれば、喜びが多く、苦を減ぼすことができるよう（376）。修行者よ、貪欲と瞋りを捨てよ（377）。

身体・口とばが静まり、心が安定し、世俗の快樂を捨てた修行者は、寂靜者 upasanta と呼ばれる（378）。修行者よ、みずから自己を励まし、自己を省察せよ。自己を守り、思念をいひやせ、汝は安樂に生活であれ（379）。自己りや自己の主である attā hi attano nātho、自己りや自己のよみのよみである attā hi attano gati。やえに自己を制御せよ（380）。ブッダの教え Buddhasāsana ふ題ふ pasanna 修行者は、轟が多く、静かで、流転の静止した安樂境 pada santa sankhārūpasama sukha じつたぬであらう（381）。たとえ年少であつ

ても、ブッダの教えに励む修行者は、」の世を照らす（382）。

る利益がある。書かる心 hipsamano がなくなれば、苦も静
か（390）。

第一六章 バラモン brahmaṇa (383) 423)

「バラモン（聖職者）のありがたを説く。第 385 • 386 • 391 • 395

423 の各偈は、「私はこれをバラモンと呼ぶ」で結ぶ（以下…
…で示す）。

「バラモンよ。欲情 kāma を捨てよ。万物 saṅkhāra の滅尽
k haya を知れば、無作（ネハ）ン）を知る akataññū (383)。バラ
モンがもしも〔止と觀の〕二法において彼岸に達した pāragū
ならば、一切の束縛は滅びる（384）。

彼岸 pāra・此岸 apāra・怖れ・束縛のない人… (385)。

瞑想 jhāyi、汚れなく安定し、なすく心をなし、煩惱
なく anāśava、最高の目的 uttamatham に達した人… (386)。

太陽は昼、月は夜、武士階級 khattiya は武装、バラモン
は瞑想して輝く。ブッダはその光明 teja により昼夜輝く（387）。

バラモンとは、悪を離れた人 bāhitapāpa も、おこないが静
か samacariyā であるが心道の人 samana も、丑口の汚れ mala
を捨て去る pabbajaya からの出家者 pabbajita と呼ばれる（388）。
バラモンを打つた。バラモンに逆らうた。バラモンを打つもの
の遺憾である。バラモンに逆らうものはわざに遺憾である
(389)。バラモンが愛好するものを抑制すれば、少なかじれ
とらわれのない人 visamyutta、……(402)。智慧 paññā 深く、

身体心心身によひ、悪をなれず、抑制した人、…
… (391)。

正しきやうた人 sammāsambuddha によひて説かれた法
dhamma も、どんな人から学んでも、その人を尊敬せよ（392）。

髪型や家柄や生まれによって、バラモンなのではない。真
実 sacca と真理 dhamma も有するものは、安樂であり、
バラモンである（393）。愚かものよ、髪型や着物が何になる
か。内部は密林であるのに、外を飾つてはいるだけだ（394）。

弊衣をつけ、やせて、ひとり林のなかで瞑想する人、…

(395)。生まれ・母系によりバラモンと呼ぶのではない。無
物 akiñcana で執着のない人、……(396)。一切の束縛を断つ、
怖れなく、執着を超越し、とらわれのない人、…… (397)。

紐（瞑り）と繩（欲望）と綱（誤まり）と馬勒（煩惱）と障壁
物（無明）を去り、やとつた人、……(398)。罵られても怒ら
ず、忍耐ある人、……(399)。怒るゝしなく、義務をおこな
い、戒を守り、欲望を離れ、〔自口〕を制御して、最後身
antimasarīra に達した人、……(400)。欲情 kāma に汚された
い人、……(401)。」の世において自己の苦の滅尽を知り、

賢く、正道と非道 maggāmagga ふをわきまえ、最高の目的 uttamattham に達した人、……⁽⁴⁰³⁾。 在家者とも出家者とも交ふいが、家なく遍歴し、欲のない人、……⁽⁴⁰⁴⁾。 弱者にも強者にも、生けるものに鞭を用いず、殺さず、殺せない人、……⁽⁴⁰⁵⁾。 敵意あるもののなかで敵意なく、鞭を用いるもののなかで心安らか nibbuta で、執着あるもののなかで執着のない人 anādāna、……⁽⁴⁰⁶⁾。 貪欲と瞋りと慢心と偽りとが脱落してい人、……⁽⁴⁰⁷⁾。 粗野でなく明晰な眞実 sacca のゝとばを語り、ゝとばで人の感情を害するとのない人、……⁽⁴⁰⁸⁾。 一切与えられないものは取らない人、……⁽⁴⁰⁹⁾。 」の世にもあの世にも欲求なく、とらわれない人、……⁽⁴¹⁰⁾。 執着なく、れりおわい、疑惑なく、不死 amata の奥底に達した人、……⁽⁴¹¹⁾。 」の世において善・惡・執着・汚れを捨て、淨らかな人 suddha、……⁽⁴¹²⁾。 汚れなく、淨らかで、快樂の生ずることを全く滅尽した人、……⁽⁴¹³⁾。 輪廻と迷惑を超え、渡つて、彼岸に達し pāragata 心が安定し、無欲で、心の安らかな人 nibbuta、……⁽⁴¹⁴⁾。 」の世において欲情 kāma (欲望 tanhā) を捨て、出家して遍歴し、欲情 (欲望) の生ずることを全く滅ぼした人、……^(415・416)。 すべての紺 yoga などられない人、……⁽⁴¹⁷⁾。 楽・不樂を捨て、煩惱なく、一切世界に打ち勝つた勇者 vīra

……⁽⁴¹⁸⁾。 死と生をのゝらず知り、執着なく、幸せな人 sugata、やもつた人 buddha、……⁽⁴¹⁹⁾。 煩惱を滅ぼした尊敬されるぐれ人 arahant、……⁽⁴²⁰⁾。 前 (過去)・後 (未来)・中間 (現在) に何のも所有せず、無一物で、執着のない人、……⁽⁴²¹⁾。 気高く、勇者 vīra、大仙人 māhesi、勝利者 vijitāvina、無欲で、「汚れを」去つた人、やもつた人 buddha、……⁽⁴²²⁾。 前世の生涯を知り、天界と地獄とを見、再生する」となく、智において完成した聖者 abhiññā voso muni、すべて成就した人、……⁽⁴²³⁾。